



# クジラがザブーン



## クジラ

フリップ・ニックリン／リンダ・ニックリン 著 ほるぷ出版 489-2

遠<sup>とお</sup>くの水平線<sup>すいへいせん</sup>で、霧<sup>きり</sup>のようなしぶきをあげている不思議<sup>ふしぎ</sup>な生き物<sup>いもの</sup>クジラ。クジラは、人間<sup>にんげん</sup>と同じように空気<sup>くうき</sup>を吸<sup>す</sup>って生きてい<sup>い</sup>るほ乳類<sup>にゅうるい</sup>です。キュイキュイ、ウォーンといった鳴き声<sup>なごえ</sup>で会話<sup>かいわ</sup>するクジラもいます。その声<sup>こえ</sup>を聞き、そのすがたを見<sup>み</sup>れば、たいてい<sup>ひと</sup>の人はクジラのとりになっ<sup>ま</sup>います。

## ねずみとくじら

ウィリアム・スタイグ 作 せたていじやく 評論社 E-ス

うみがだいすきなねずみのエーモスは、りっぱなふねをつくり、ふなでしました。あるばん、かんばんからほしぞらをながめていたエーモスは、ふねからうみにおちてしまいます。おおうなばらのまんなかにとりのこされたエーモスのまえに、<sup>いっ</sup>「とうのおおきなくじらがあらわれて「きみは、なにざかなだい？」とたずねました。

## クジラと海とぼく

水口 博也 文 アリス館 489-3

大阪<sup>おおさか</sup>で生まれ育<sup>う</sup>ったぼくは、夏<sup>なつ</sup>がくるといつも母親<sup>ははおや</sup>の実家<sup>じっか</sup>である徳島県<sup>とくしまけん</sup>の海辺<sup>うみべ</sup>の町<sup>まち</sup>ですごした。この小<sup>ちい</sup>さな町<sup>まち</sup>で、沖<sup>おき</sup>から水揚<sup>みずあ</sup>げされた魚<sup>さかな</sup>やウミガメ<sup>さんらん</sup>の産卵<sup>め</sup>を目<sup>め</sup>にし、ぼくは海<sup>うみ</sup>のなかの世<sup>せ</sup>界<sup>かい</sup>へのあこがれ<sup>つよ</sup>が強<sup>つよ</sup>くなっ<sup>つよ</sup>てい<sup>つよ</sup>った。中<sup>ちゅう</sup>学生<sup>がくせい</sup>になっ<sup>つよ</sup>たある日<sup>ひ</sup>、テレビ<sup>み</sup>で見た<sup>み</sup>クジラ<sup>む</sup>の群<sup>む</sup>れの映<sup>えい</sup>像<sup>ぞう</sup>に、ぼくの目<sup>め</sup>は釘<sup>くぎ</sup>づけになっ<sup>つよ</sup>た。

## シップ船長とくじら

かどの えいこ さく 偕成社 913-カ

おやすみのひシップ船長<sup>せんちょう</sup>は、じょうずに、なんびきもさかなをつりあげている男<sup>おとこ</sup>の子<sup>こ</sup>に声<sup>こえ</sup>をかけました。シップ船長<sup>せんちょう</sup>は男<sup>おとこ</sup>の子<sup>こ</sup>とならんでつりをしましたが、さかなは一<sup>いっ</sup>ぴきもかかりません。まけずぎらいのシップ船長<sup>せんちょう</sup>は、でっかい海<sup>うみ</sup>にくじらをつりにいくとするか、といました。

## ぼくのクジラ

キャサリン・スコウルズ 作 百々 佑利子 訳 文研出版 933-ス

サムは、あらしのあとの浜<sup>はま</sup>辺<sup>べ</sup>で、じつとよこたわるクジラを見<sup>み</sup>つけた。まるい背<sup>せ</sup>は太陽<sup>たいよう</sup>にさらされ、その上<sup>うへ</sup>をカモメがぐるぐるせんかいしている。誰<sup>だれ</sup>もいない浜<sup>はま</sup>辺<sup>べ</sup>で、サムは水<sup>みず</sup>をすくい、クジラのかわいた背<sup>せ</sup>にかけてやった。「きみはクジラ？それともサメ？」クジラが、サムを見<sup>み</sup>かえした。

## くじらのあかちゃん おおきくなあれ

神沢 利子 文 あべ 弘士 絵 福音館書店 E-ア

しずかなみなみのうみに、ざとうくじらのおかあさんがいます。「あかちゃんはどこにいるの」とみかづきさんがこえをかけ、くじらのおかあさんは「あなたがまあるくなるころに、うまれてくるでしょう」とこたえました。みかづきさんが、まんまるになったそのよる、あかちゃんはおなかから、そとのうみへとすべりでした。

## ともだちは海のおい

工藤 直子 作 理論社 913-ク

星<sup>ほし</sup>をかぞえながらゆるゆる泳<sup>およ</sup>ぐいるかのあたまが、こつんとなにかにあたった。用心<sup>ようじん</sup>ぶかく眺<sup>なが</sup>めしていると、くろいカベのようなくじらが「さびしいくらいしずかだと、だれかとビールを飲<sup>の</sup>みたくなる」と呟<sup>つぶや</sup>いた。いるかはくじらにはなしかけた。「ぼくといっしょに飲<sup>の</sup>まない？」くらい夜<sup>よる</sup>の海<sup>うみ</sup>で同<sup>おな</sup>じきもちのいるかとくじらがであった。